

---

# Hast-all

氷之

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

H a s t - a l l

### 【Nコード】

N 4 3 4 7 I

### 【作者名】

氷之

### 【あらすじ】

夏。短い人生を終えたはずのとある少年が、未知の生物 ハスタールと出会い、非日常へと誘われる。やがて、ハスタール達の生存競争に巻き込まれていく少年たち。「生きる」ために、少年は、ハスタールは、何を犠牲にし、何を得るのか。

## ブローグ

### ブローグ

景色が、目まぐるしく移動していく。

自分の、後方から、前方へと。

木々が、枝が、岩肌が、流れていく。

その速度は 一体どれだけののだろうか？

切れ切れの意識の中で考える。

自分は、今 仰向けに落下しているのだ。

自由落下。

物理で習った。

自分の体重が、60kgで…まだ落下が続いているなら、もう100mは落ちていている？

やけに頭が冴えて、変な気分だ。

ああ、でも その受験のために必死に身に付けた知識も、今ここで無駄になるのだろうか。

何故なら、この先にあるのは、只の硬く、湿った地面に他ならないからだ。

下に向かって。重力という、抗いようもない、物理法則に従って。

どンドン、どンドン、加速していく、体。

正面には、初夏の青い空。

ゆっくりと、視線を右の方に巡らすと、そこには、自分と同じ速度で落下する母の姿。

その表情は、泣いているようにも、笑っているようにも見えた。

そんな顔するならば、

思考の断片で、その母に訴えかける。

こんなこと、しなきゃ良かったのに。

自分をこの虚空へと突き落とした 母へと。

やがて、

“ 終わり ” は唐突に訪れた。

「……朱野あけのが死んでる」

それが今日、彼に掛けられた、一番最初の言葉だった。

朱野、と呼ばれた、茶髪の少年は、うつ伏せのまま、傍らに親友の気配を感じる。

「おい、朱野ってば……次、移動教室だって」

時は2学期が始まったばかりの9月初旬、午前10時。そこはとある高校の教室の中。

朱野という男子学生は、机に突っ伏したまま、狸寝入りを決め込んでいた。

「次、前川の授業だぞ。お前目えつけられてんじゃないの？知らねえからな」

前川、という壮年の男性英語教師は、口ではうるさく言わないくせに、ちゃっかり評価は下げるといふ、何とも嫌らしい教師だ。英語の発音は、甚だ怪しいが。

そのことを知っていてなお、貪欲に睡眠を貪ろうとする彼の頭をぐりぐりと小突く親友。

親切心からやっているのだろうが、いよいよ寝ている（フリをしている）彼は、堪忍袋の緒が切れたのか、顔を伏せたまま、がしりとその親友の手を掴む。

「お、生き返った？」

「颯人、」

颯人と呼ばれた親友は、手を引っ込めようとするが、存外強く握られており、振り払うことができない。

「うざい」

彼にそう言われ、固まる颯人。

「お…おい、昂かういちくんよ…それはあんまりだ」

苦笑いを浮かべた颯人に、朱野昂一は、

「そうか。じゃあ、お前が言ってた通り、俺は死んだってことにして、俺を見捨てて前川の元へと赴いてくれ、友よ」と、追い討ちをかけた。

はあ、という颯人のため息。多分今彼は、とても呆れた顔をしているのだろうと、昂一は思う。

もう一度強く手を振り払い、ようやく解放された颯人は、小声で、昂一の2つ後ろの席で、次の授業の教科書を揃えている女子学生に告げた。

「帆波<sup>ほなみ</sup>……あとは頼んだ」

セミロングの黒髪、そこそこ整った顔立ちの女子学生は、またか、といった表情で、分厚い参考書を手に持ち、立ち上がる。

「颯人くん。先行って、前川先生に、帆波 楓と朱野 昂一は少し遅れます、って言うておいて」

早口で告げると、颯人はその雰囲気<sup>きふき</sup>に気圧されたように、「あ、お」としどろもどろに答え、教室を後にする。

彼を最後に、教室には昂一と楓を除いて、誰も居なくなった。つまり、二人きり。

「……」

静寂が二人を支配する、静かな教室。グラウンドから、どこかのクラスの喧騒<sup>けんそう</sup>が聞こえる。

「……昂一？」

そして、楓は彼の頭にそつと手を載せ、耳元にそのふっくらとした口を寄せ。

「起きろっ！……！」

力の限り怒鳴った。

「う……」

余りの大音量に、さすがの昂一も僅かに身動きする。

それもそのはず。彼女は、その大きな声と、何事にも動じない肝の据わった性格を買われて、この3年6組のクラス委員になったのだから。

「何だよ、ほつといてく……」

『おい、起きろボケ』

発しかけた昂一の抗議の言葉を遮る、“声”。

それは彼に覚醒を促す、落ち着いた男の声。

しかし、彼らの周囲には、彼と、楓しか居ない。

(何だ、急に)

その“声”を聞いた昂一も、特に慌てることもなく、心の中で“声”に応じる。

まるで、それが日常的に行われていることのように。

『起きろつつつてんだよバカ。お前、後悔するぞ』

珍しく自分に何かを強要する声に、昂一は訝しげに訊く。

(俺が、一体何を後悔するんだ?)

すると、その声は、僅かな嘲笑を含んだトーンで、答えた。

『そのまま顔上げて、視線を75。ほど上に移してみろ』

上?と呟き、上に何かがあるものかと、言われるがままに顔を上げる。

果たして、その先には。

いかにも凶悪そうな分厚さを持つ、受験対策の参考書の背表紙。

そして、その向こう側には、

今まさにそれを振り下ろさんとする、というか振り下ろした、能面

のように無表情な、幼なじみの顔。

「……って、危な！」

間一髪、昂一はその参考書を両手で白刃(?)取りする。

「……」

一瞬の静寂の後に、楓はニコツと笑った。  
気持ち悪いくらいに。

「あゝ、何だ、その……落ち着くんだ、楓」

その笑顔に寒気を感じた昂一は、慌てて立ち上がるうとし、腰を浮かす。

しかし、楓は、そんな昂一の両肩を、

「落ち着いてるよ?」

と、上から満面の笑顔のまま押さえつける。怖い。落ち着いてない。絶対。

「この前、約束したよね?今度授業中に寝てたら、許さない、って」  
楓は、許さない、の部分をやけに強調して、言い放つ。

許さないとは、具体的に何がどうなるのだろうか。今更ながら、昂一はそんなことを思う。

そんな約束したっけ?などととぼけようものなら、彼は容赦なく、今年の夏インターハイ3位の回し蹴りを食らうことになるのだろう。それは色々な意味で、マズい。

「あ……あ……何だ。昨日の夜、色々思い出してさ。眠れなかったんだ」

とっさに思いついた言い訳だったが、すぐさま彼は、もっと気の利いた言い訳は出来なかったものかと後悔する。

彼女が、楓が、とても、とても哀しそうな表情をしたからだ。

「あ、いや、今のは」

口が滑った、と言う前に、

「ごめん。悪かった。でも……」

一瞬俯いた楓だったが、すぐに面を上げ、昂一の瞳を真つ直ぐ見据える。

「でも、ちゃんとしなきゃダメだよ。おばさんのこと、辛くても」おばさん。彼女がおばさんと呼ぶのは、昂一の母のことである。

昂一の母は、4ヶ月前に、運悪く崖から転落し、亡くなった。そして、共に事故に遭った昂一は、奇跡的に一命を取りとめた。

と、世間では認知されている。

実際に何が起きたかを、当事者である昂一以外に知る由はない。

少なくとも、昂一の自宅の斜向かいであり、幼少から家族ぐるみの付き合いをしてきた楓の家庭でも、そう認識されているようである。

(……それにしてもまあ、こいつは、人なら言いにくいようなこういうことを、ちゃんと言えるのが偉いよな)

密かに、そう思う。

身内の不幸は、普通であれば、あまり触れたくない非常にデリケートな問題であろう。

実際、昂一の親友である颯人さえも、“事故”が起こってから1週間ほどは、昂一をまるで腫れ物に触るかのように扱った程だ。(うざかったので、その時もうざい、と素直に言ったら凹んでたが、まあ颯人だしどうでもいいことだ)

別に、颯人を恨んだりなどしていない。

それが、普通の反応だから。

しかし、彼女はそうしなかった。

葬式の翌日、彼女は独りで家の片づけをしている昂一のもとに乗り込むと、開口一番、こう言ったのである。

「次学校にいくときから、あんた、居眠り禁止だからね」

元々、たまたま近所に空手道の推薦で入れそうな高校があったから、という理由で選んだこの高校。

そのためか、昂一の授業態度は、控え目にも良いとは言えなかった。というか、すこぶる悪かった。

別に授業を妨害したりはしないものの、とにかく寝る。何が何でも寝る。

部活動の疲れと、学業に対する興味の無さが成せる業(?)だったが、その見事な眠りっぷりは、教師内でも噂になっており、半ば呆れられている状態だった。

そんな風に、空手道だけは頑張つて2年生でインターハイに出場したものの、他には特に何もせずにごろごろしてきた、高校の3年目の5月に。

彼は母を喪い。

しかし彼の幼なじみの少女は、彼に「授業態度を改めよ」と言う。

それは、決して彼女がクラス委員だからではない。

何故、と問えば、それがあんたにできることだからでしょ、ときくと彼女は言うだろう。

亡くなった母がシングルマザーであつたがために、突然独り身となり、

もはや経済的にも精神的にも、空手道は続けられない状況であることも、全て解つた上で。

だからこそ、この帆波楓という少女は、インターハイ3位の空手の腕を差し置いても、凄い女なのだ。

「ま、あんたのことだから、また約束破るかな」とは思つてたけどさ」

楓は昂一の机の端に座り、そっぽを向く。

「いや、悪かった。もうしないから」

昂一は一応彼女の許しを乞うてみるが、

「それ、1週間前にも聞いたけど？」

あえなく撃沈。

そう。楓と約束（というよりは、一方的な宣告だったが）を交わしたものの、昂一は、何度が約束を破ってしまっている。その度に、拳やら蹴りやらをお見舞いされていた昂一だったが、それでも懲りない彼に、彼女が一週間前言った言葉が、

「今度寝たら、絶対許さない」だった訳で。

その、彼女が絶対許さないシュチュエーションが、今正に再現されている訳だ。

「許さないって、どういうことか、分かる？」

「さ……さあ……」

「謝っても、反省してても、罰則を与えるってこと」  
ひい。罰則で。

なんつう女だ。

などということは、口が裂けても言えない。

「それで僕は……何をしたら宜しいのでしょうか、楓サン」

「うん、どうしよつか？」

「決めてないんかい！」

という昂一のツッコミをよそに、彼女は黒板の上にある時計を見上げ、やば、と呟く。

「もう授業始まってから5分経ってるじゃん！私クラス委員だから先行くよ？昂一も2分以内に来てね！でないと、まあ、アレだからアレって何だ！」

という2回目のツッコミをする暇もなく、彼女は走って行ってしまった。

というか、2分とは。ここから、今授業が行われているLL教室までは、全速力で走って、ジャスト2分。つまり死ぬ気で走れるってことか。

とりあえず、“アレ”が何なのか分からなくて怖い昂一は、急いで教科書一式を取り揃えて、廊下をダッシュするのだった。頭の中では、『雌って生き物は厄介だな』という、オヤジ臭いばかりが聞こえた。

彼女に脅迫された2限目を経て、放課後。

例の“不慮の事故”により、部活を続けることが出来なくなってしまった昂一は、要するに帰宅部。

このクソ狭い駐輪場で何やらストレッチをしている空手道部の間を通り抜けなければ、目的のボロいママチャリには近づけない。気まずい。

大体、昂一も楓も、家が近くて空手もまあそこそこ強いからこの高校を選んだ訳だが、どちらかというと進学校であるこの高校には、十分な設備がない。そのため、武道場も他の部活動と譲り合って使わなければならず、こういう面倒臭い事態が発生する。

何でこんな気分にならなくてはいけないのか。そもそも、

(ホントは部活辞めたのだから、精神的理由でも、経済的理由でもないんだが)

俯いたまま、掛け声を掛けてストレッチをする部員、つまりかつてのチームメイトの中を通過しようとする昂一に、心の中の“声”が、語りかける。

『ハッ。何を今更』

(お前は黙ってる)

『全く、人間はすぐ感傷に浸る。現状ではどうしようもないことを悔やむ。短い命のくせに、無駄なことばかりしゃがる』

(……バカにしゃがって。誰のおかげで生きてられるんだ)

昂一は、脳内の“声”に、低く抑えたトーンで話しかけた。しかし、“彼”は、そんな昂一を笑った。

そして、こう述べる。

『……ハッ。全く同じ言葉を、お前に返してやるっ』  
その声に、昂一の心は、ずきりと痛んだ。  
誰のお陰で生きていられるのか。

“彼”がいなければ、自分は？

「あれ？昂一い？今日はもう帰り〜？」

沈鬱した思考の中に割って入った明るい声は  
思った通り、楓のものだった。

空手道部の女子主将である彼女の発言に、皆が皆耳を傾けており、  
身元がばれたことでより一層気ますぐなる。何でおまえはそう、空  
気が読めないんだ！

「もう、って。特にすること無いっての。今日バイトシフト入って  
ないから、帰って寝る」

「へえ。じゃあさ、」

また例の笑み。嫌な予感しかしない。

「昼間の罰則。練習、付き合ってよ」

逃げよう、と思考する前にはもう、がしりと肩を捕まれていた。

練習に付き合うとは、即ち、技を受ける役を受け持て、ということ。

「あ〜……出来れば、怪我のリスクのない罰則にしてほしいんだが」  
何故か反射的にホールドアップの姿勢を取ってしまった昂一は、交  
渉を試みる。

出来れば、怪我をするような真似は、極力避けたいのだ。

そうでないとして、

分かっってしまうから。

「何で？昂一だから、大丈夫でしょ？」

曲がりなりにもインターハイに出場した男子が、女子に力負けする  
ことはないだろう。例え相手がインターハイ3位だとしても。

しかし、たとえ僅かな青あざであっても、彼にとっては致命的な傷なのだ。

本当に死に至る、という意味の致命傷ではなく、自らの社会的な存在が、危ぶまれるという意味の致命傷。

だから、昂一は傷つくことを避ける。

それに、これは心の中の“声”との、約束でもあった。

「悪い。まだ、その、体が痛むんだ」

だから彼は、また彼女に嘘を吐く。

そして彼女はまた、哀しい顔をする。

あと何百回、何千回、同じことを繰り返さなければならぬのか……  
反吐がでる。

いつそのこと、死んでしまうことが出来ればいいのに。

それが出来るのであれば。

しかし“声の主”は、それを許さないだろうが。

「そっか……そうだよな。そればかりは仕方ない……か」

楓が、ゆっくりりと、昂一の肩に載せた手を下ろし、逆の手で駐輪場を指し示す。

「帰ってよし」

「命令形かよ!」

「嫌なら練習付き合おう? 急所は外すよ?」

「……。帰らせて頂きます」

うなだれて、すすすくと帰らざるを得ない昂一に、一歩下がって道を空ける部員たち。

……頼むから、注目しないでくれ。何か虚しい。

昂一が去った後も、女子部員が楓に、「罰則って何のことですか?」「また、朱野先輩何かやらかしたんですか?」なんて、小声で聞いていた。おい、聞こえてるぞ、そこ。

そんなこんなで、今日も憂鬱な気分で学校を後にし、帰途についた。「全く…いつまでこんなこと続けりゃいいんだか。いつかボロが出そうだな」

夕方の、住宅街。自転車に乗って帰る昂一の周りには誰も居らず、彼は、声に出して呟く。

そんな独り言とも取れる言葉に、  
『いつまでって、そりゃ、お前が死ぬまでだ』

“声”が答え、そして付け足す。

『本当の意味でな』

「本当の意味で、死ぬとき……ねえ」

一体それはいつなんだか、と、思考の深いところで考える。

“声”の主に悟られぬように。

いつまでこんな茶番を続けなくてはならないのか。

「エマは、いつになったら飽きるんだか」

『ああ?』

しまった。気づいたら声に出してしまっていた。失態失態。

声の主 “エマ” は、相変わらず乱暴な口調で、その独白に答える。

『少なくとも、俺はもうしばらく居座るつもりだ。お前の周りは、なかなか面白いからな』

「……厄介なこった」

『心外だな。お前だって、面白いから未練があるんだろ?』

エマに指摘されて、どうだろうか、と考える。

何で自分は未だにここにいる?

部活も辞めて、楓との約束も破って……居る意味、あるのかよ。

住宅街を抜けたところにある、商店街を横切る踏切に突き当たる。ちょうど、警報機が鳴り、遮断機が降りてきたところだった。そう、例えば、そこに居る女の子みたいに、線路の中に立ち尽くしていれば、跡形もなく消えることができるのだろうか。いや、確か鉄道事故は遺族が莫大な慰謝料を払わなければならなかったんだっけ？近い遺族とか、居ないけど。叔父さんとここに請求が行くのか？

そこで、昂一は、自分の思考の中に、妙な単語が混じったことに気がついた。

……ん？

……女の子？

『……昂一。今、前は見るな』

珍しく……いや、本日2回目か？

脳内の声による、命令。

しかし、今度は催促ではなく、制止である。

しかし……まあ、見るなど言われたら見てしまうのが、悲しいかな、人間の性であり。

「なっ……ば、バカな……？」

鳴り響く、警報機。

遮断機と遮断機の間。

人が居てはならない、遮断機が通行を許した時だけ渡ることを許される、線路の真っ只中に、少女が、立っていた。

『バカが。お前、絶対、』

あの中に行くなよ。

エマが、忠告を終える前に、

昂一は飛び出していった。

踏切の中に。

少女は、自分が踏切の中に取り残されたことに、別段焦りも感じて居らず。

しかし、自殺願望者のように、覚悟を決めた顔でもなく。

ただ、茫洋と、

これから一体何が起きようとしているのか、まるで分からないと言った表情で、

ただ、そこに立ち尽くしていた。

(……間に、合え……!)

歯を食いしばっているので、声は出ない。

ただ、念じる。

遠くの方で、ふわぁん……という、若干間抜けな電車の警笛が聞こえる。

つづいて、女性の金切り声のような、凄まじいブレーキの音。

それは、まだ遠く……じゃない。気づけば、すぐ近くから。

真っ白なワンピースを来た細身の少女は、こちらの存在に気づいたのか、迫る昂一を見て、

「?」

首を、傾げる。

いや、頼むからこっちじゃなくて電車に気づいてくれ!

そんな昂一の願いも虚しく、少女は相変わらず立ち尽くしたまま

迫る電車の目前で、昂一に突き飛ばされ

粗い砂利の上に、どすん、と尻餅をついた。

(間に合っ……)

『てねえよ！バカ！』

僅かに、電車の前面に残っていた昂一の右足が、衝撃を受ける。

「んなっ……！」

辛うじて直撃を免れたものの、たかだか人間が電車の突進に耐えられるわけもなく、

昂一は受け身も取れずに、綺麗な放物線を描きながら数メートル吹っ飛ばされて、砂利の上に背中から落下した。

ややあつて、耳障りな音を立てて停止する電車。

車掌が電車から青ざめた顔をして降りてきて、商店街にいた人々も、何事かと、集まってくる。

「……ぐ」

背中を強打して息が詰まったが、何事もなかったかのように上体を起こした昂一に、車掌は若干安堵の表情を見せたが、

(ちよつと、やばいことになったかも)

内心、焦る。

あれだけ派手な吹っ飛び方をしたら、誰もが生存を疑うだろう。

そういう状況を作ってしまうことは、非常にマズい。

『……とりあえず怪我を疑われるより、さっさとこの場から立ち去れ。救急車で運ばれでもしたら敵わん』

エマの囁きで、昂一は我を取り戻した。

まずはここから立ち去るのが先決だが……

昂一は立ち上がり、相変わらず尻もちをついて昂一をぼかんと見つめている少女を見遣る。

何故そんなことをしようと思ったのかは分からない。

気がつくと昂一は、少女の元に駆け寄り、彼女をお姫様抱っこして、

「いや、電車とぶつかったの、俺のカバンだったんで！カバンで良かった！俺ピンピンしてるし！」

と、意味不明極まりない言葉を残し、自転車も乗り捨てたまま、家に向かつてひたすらダッシュした。叫んだ反動で、思わず肺に溜まっていた血を喀血しそうになるが、寸前で堪える。

ここで血なんて吐いたら、即座に病院行きだったの。

周囲から、ざわめきというかどよめきが起こった気がするが、気にしない。

車掌が、「ちよ、ちよっと、君!？」なんて言った気もするが、気にしない。

エマが、『アホ、お前、やめとけ!そいつは、』なんて言ってる気もするが、気にしない。

『そいつはハスタルだ!関わるな!』

……え。

今、何て?

昂一は、古いビルとビルの間、裏路地で、立ち止まった。

エマは、もう一度、ゆっくりと答える。

『オレと同じ、ハスタルだ。触るんじゃない。生命いのちを吸い取られる』  
エマ、と同じ、ハスタル?

昂一は、腕の中の少女に目を落とす。

ハスタル。

人間にとっては、未だ未知の生命体。

人間に寄生、いや憑依し、宿主を転々と変えながら、何百年も生きてきた、生命体。

実体は持たない。ハスタルに憑依した人間だけが、その姿を認識できる。

ハスタルは、人間に憑依しないと、24時間ほどこしか生きることができないが、

彼らが憑依するのは、厳密に言えば、人間ではない。人間の、死体。

死した人間の魂を半分喰らい、その死体にもう一度宿ることによって、

一度死んだはずの人間は、ハスタルと共存しながら、生きる。

「つまり」

かつてエマから教えられたハスタルに関する知識を呼び起こし、昂一の腕が震える。

「この女の子は、俺と同じ、」

その言葉を口にするのがとても恐ろしいことのように、

「死んだ人間に、ハスタルが憑いた……モノ、だってことか？」

恐る恐る……自らの中に住まう、生命体に、訊く。

『……違う』

しかし、彼はそれを否定する。

『ハスタルに憑かれた人間じゃない。こいつ自体がハスタルだと言っている』

それは、想像していたよりも、もっと衝撃的な答えであった。

1 - 2 <未知>

エマの言葉を、昂一は即座に信じることができなかった。

だって…事前にエマから教えられていた、ハスタルの特徴と、あまりにもかけ離れている。

というか、一つも当てはまっていない。

未知の生命体？

実体は持たない？

人間の死体に憑依？

だってこの子は、

どう見ても人間の女の子で、

お姫様抱っこしてるから実体あるし、

ハスタルだというのに、人間に憑依してない？

実際昂一は、他のハスタルに憑かれた人間に出会ったことは無い。だから、ハスタルに憑かれた人間が、こんな風に見えるのか？

『バカめ。物分かりの悪い奴だ。つまり、』

それは、唐突に。

唐突に、昂一の目の前に、夜空のような、濃紺の体毛を持つ、美しい狼が現れた。

体高は、人間の1.5倍ほど。

背には、体毛と同じ闇色の、1対の翼。

それこそ、エマという名を持つ、ハスタルそのものであった。

4カ月前、崖から転落して 否、落とされて。

たった一つの命を失った時に現れた、美しき、恐ろしき、獣であっ

た。

『今のオレの状態と』

エマは、一抱えほどありそうな前肢で、昂一の腕の中の少女を指し示す。

少女は、きよんとした表情で、自分の何倍も大きなエマを見上げている。

『その女　に見えるハスタルが、同じだと言っているんだ』

「……………」

昂一は、言葉を失った。

どう控え目に見ても、それは、無い。

『分かったら、さつさとそいつをここに置いてすらかるぞ。ここにいつまでも居る訳にも』

「分からないじゃないか」

突然言い放った昂一に、エマは、何がだ、と言いたげに片方の目を眇める。

「こいつはハスタルじゃないのかもしれない。だって、あまりにも

…」

昂一は、エマの金色の瞳を見据えた。

「あまりにも、お前と違いすぎる」

『あのなあ……………』

エマは、心底呆れた様子だった。

『ただでさえ、ハスタルつてのは個体差が大きい。オレと同じ姿をしている奴なんて、他には居ないだろう。だから、人型のハスタルが居ても不思議じゃねえし、』

鼻面を、昂一にずい、と突きつける。

『ハスタルはハスタルの存在を感知できる。何でかは分かるだろう？』

そう、もう一つ、エマから教えてもらった知識が、昂一の中には、あった。

ハスタルの餌は、ハスタル。

体を動かすための器が車体、人間の魂がエンジンオイルだとしたらガソリンになるのは、他のハスタルなのである。

だから、ハスタルは、お互いに存在を認知できる。

実際、少女も、エマの姿を認識しているし、ただの少女という訳でも無いのだろう。

「いや、でも、この子……このハスタルに、敵意はないみたいだけど」

「お前、お人好しにもほどがあるぞ。脳味噌腐ってんじゃないか？ そいつに魂喰われるぞ」

「油断させて俺を狙ってるのか？ わざわざ他のハスタルが憑いてる俺を？ お前は宿主の体を他のハスタルに横取りされるほど弱いのか？」

「手前……殺すぞ」

昂一の挑発めいた物言いに、エマが喉をグルグルと鳴らす。狼の姿になると、声も狼っぽくなるんだな。

「何でそいつの肩を持つ？ オレにはそっちの方が不可解だ。関わることによって得られるメリットは、少なくともお前には無い」

「そりゃ、そうだけど」  
でも。

もし、あの時、昂一が助けていなかったら。

この、実体があって、人間の少女と寸分変わらぬ姿をしたハスタルは、どうなっていた？

ハスタルだから、怪我はしなかったかもしれない。だが、あのままであれば、色んな意味で只事では済まなかったことは、火を見るより明らかだ。

別に、守りたいとか、そんな大層なもんじゃない。

ただ……何か、放っておくことができない。

それが、この少女に対する、正直な感想であった。

「何でって言われたら、まあ……」

昂一は、思い出す。

何故、自分はこの少女を、あの現場から連れ出したのか。

何故、これほどまでに、執着するのか。

「それは」

線路に立ち尽くす少女は、

あまりにも無垢で、あまりにも無知で。

生まれたての雛のように、あまりにも……真っ白、だったから？

(いや、それは感想であって理由じゃない)

昂一は、心によぎった思いを否定する。

そして出した結論は、

「それが…俺にできること、だから…かも」  
だった。

あなたは、あなたの出来ることをやればいいの。

身に余ることは、やらなくていいから。

でも、できることを、出来ない振りするのは…駄目。

空手道場に通っていた頃、よく、楓が口にした言葉だ。

自分に、できること。  
少なくとも、あの状況で彼女を助けることができたのは、自分だけ  
だったと思う。

思いつ上がった考えかもしれない。浅はかかもしれない。  
けれど、この少女のためなら、この自分にも、できることがあるの  
ではないか。

直感的に、そう思った。

『……そういうのを、お前ら人間は、幼女誘拐って言うんじゃないか？』

……。  
それを言われたら、元も子もない。ぐうの音も出ない。

「でもまあ、この子、ハスタルなんだろう？」

『さつきからそう言っている』エマが、鼻を鳴らす。

『で、お前はこれからこいつをどうするつもりでいるんだ？』

「……とりあえず、話を聞きたい」

昂一は、静かに言う。

果たして、出会ってからひと言も言葉を発しないこの少女と、会話が成り立つのかどうかは妖しかったが、それでも、彼は、知りたかった。

彼女が、何者で。

何故あそこにいる、

何をしようとしていたのか。

「……だから、詰まるところ一人暮らしである俺の家に連れていく。これは断じて幼女誘拐じゃない。だってハスタルだし。エマがそう言ってるし。だから誘拐じゃない」

昂一は、言葉を続ける。自分に言い聞かせるように。ぶつぶつと。

その様子を見ていたエマは、しばらく黙っていたが、ややあって、  
『ハ。ハハ、ハハハハハ！』

大声で笑い出した。そんなに面白かったか？

体がでかい分、その声は、地響きのように地面を震わせた。

『お前は、本当に面白れえな。それは、つまり』

まだ笑いが治まらないのか、息も絶え絶えといった様子で、さも面白そうに話す。

『オレに餌を提供するということか？』

「餌……だと？」

餌？

食糧？

只の……栄養源？食欲を満たすモノ？

『無抵抗のハスタルが目の前にいて、喰わないバカがどこにいる。

それに、そろそろ』

にやりと、口角を上げる。

上顎と下顎の間からは、鋭い牙が覗いた。

『腹が、減った』

ハスタルは、一度ハスタルを喰らえば、半年ほどは餓死せずに済む。

しかし、それはあくまで死ぬことはない、ということであり、

2カ月ほど経てば小腹が空しくし、4カ月ほどで空腹を感じる。

それに、ハスタルは絶対数が極端に少ない。

だから、貴重な“餌”を、みすみす見過ごすはずがないのだ。

『お前がそいつを連れ帰るのであれば、オレはそいつを喰う。オレが生きるためだ』

「……………」

昂一は、考える。

このまま、この貪欲な同居人に、この少女を喰わせる訳にはいかない。

自分は、この少女に、教えなければならぬことがある。きっとある。この少女から、教わるべきことがある。

少女は、これから喰われるかもしれないのに、自分の置かれている状況には無関心なようである。

ただ、昂一の腕の中で、為すがまま。

とりあえず時間を稼ぐために、昂一は、言葉を紡ぐ。

「お前…… どんだけ食いしん坊だよ」

「…… ふざけんな。人間の何分の一の食欲だと思ってんだ。これでもオレは我慢強い方だ」

「大体、お前ら、そんなにお互い喰い合ったら、絶滅するんじゃないのか？」

「確かに昔よりは見つけにくくなったがな。だが、餓えるほどじゃねえ。現にこうして、目の前に餌が居る」  
『いい加減餌から離れて欲しいところだが。』

しかし、ふと、昂一の中に素朴な疑問が浮かぶ。

そして彼は、時間稼ぎではなく、単なる知的好奇心から、その疑問を口にした。

「…… 所謂いえばお前らって、どうやって増えるんだ？」  
知っているようで知らなかったこと。

先程、エマは、餌には事欠かないと言っていた。

大昔から喰い合っており、もしその絶対数が増えないのであれば、半年に一度同族が見つかるほど、数が存在しないのでは？  
つまり、ハスタルも生物だとするのなら…増えている？

「もしかして、ハスタル同士で交わる…とか？」

「……オレ達に性別は無い。人間と一緒にするな」

「けど…まだ絶滅する気配がないってことは、増えてる筈なんだよな」

そこまで言って、昂一の頭に、最悪な想像が浮かび、思わず鳥肌が立った。

まさか、もしかして…

ハスタルに憑かれた人間同士が交わる…とか？

それは嫌だ！断じて嫌だ！

大体、相手が異性とは限らないじゃないか！

頭を抱えて悶絶する昂一に、

「……」

エマは考え込んだように突然押し黙り、答えない。頼むから否定してくれ。

もう俺、死んでもいいかな。死のう。

「……お前はもう死んでる」

何その胸に北斗七星がある人みたいなセリフ。

一人で勝手な想像をして悶える昂一を視界の隅に捕えながら、

「……そうか。なるほど、そういうこと、か」

一人、納得したように少女を見下ろす、エマ。

少女は、自分を抱えたまま唸っている少年と、自分を見下ろしているハスタルを、交互に見遣る。

そしてエマは、なおもヘッドシイクしながらうんうんと呻く昂一に、低い声で、こう告げた。

『おい昂一。さっきの答え、教えてやるうか』

「ううう……あ。え？」

『ハスタルが、どうやって増えるか、だ』

さっきまで押し黙っていたエマが、なぜ今更？

その様子に、昂一は戸惑いを覚える。

『とりあえず、そいつを連れ帰る。話は、帰ってからだ』

「……………喰うのか？」

自然と、少女を抱く昂一の手には、力が入った。

『喰わない』

……………は？何で？

さっきまであれほど少女を餌だ、餌だと言っていたエマが、彼女を、喰わない？

何故、急に意見を180°翻した？

そもそも、何でこういう話の流れになったんだっけ。

エマの意見が変わったのは、確か……………その、ハスタルの生殖の話をしてきた辺りだった。

……………ま。まさか……………

エマが、この少女を、然るべき“相手”として見なしたのか！？

またも自らの妄想に悩まされる昂一の思考を知ってか知らずか、エマは一つ大きなため息をつくと、

『とりあえず、足。治せ』

とだけ言い残し、霧のように消えてしまった。

あるべき場所に　昂一の体の中に、戻ったのだ。

一瞬巻き起こった風で、少女の赤みがかった長髪がふわりと浮いて、元あった場所に、ぱさりと落ちた。

言われて初めて気がついた。

昂一がエマに指摘された、電車の直撃を受けた右足首は、妙な方向に捻じれている。

（痛覚がないってのも、不便なものだ）

そういえば以前、前川の授業丸々1時間を睡眠時間に充てたがために、楓に裏拳を喰らい、口の中が切れていることに気付かないまま昼食を摂って大変な目にあったことがある。

学食の中華スープが、ミネストローネに早変わり。3分クッキングでもこんなことできない。

あの時ほど、何で痛覚は無いのに味覚だけが残っているんだ！と思っただことはない。

「悪い、ちょっと待ってて」

そう言っただけ、今まで大人しく腕の中で納まっていた小柄な少女を、地面に立たせる。

少女は相変わらずうんともすんとも言わなかったが、黙って傍らに立っている様子を見ると、一応は了承してくれたようだ。言葉は通じるのか。

「ん、どうなってんだ、こりゃ」

とりあえず、準備体操で足首を回すように、グリグリと地面に爪先を押しつける。

が、そんなことで治るなら、苦労はしない。脱臼しているようだ。

よくダツシユができたもんだ。というか、痛みが無いにしても、普通にできない。

よほど必死だったのか。

『貸せ』

体内に戻ったばかりのエマが、低い声でそう言うと、次の瞬間には、

昂一は体の自由を奪われていた。

強制的に、貸し出された、昂一の体。

魂を喰らって人間の体に共存するハスタルは、宿主である人間の体を操ることができる。

エマは進んでこの強行策を使うことはほとんど無かったが、今までに数回経験しており、

やはり今回も、想像した通り、あまり気持ちのいいものでは無かった。

昂一の体を借りたエマは、地面に座り込み、力づくで足首を捻り戻そうとする。

『まあ、こうしとけば元に戻るだろ』

「あ……ちよつと、え、エマ……そこは、物理的にそんなに曲げたら、やばいって、うわ！」

ボキッ、という、何とも後味の悪い音を立てて、足首は、元あるべき場所にすつぽりと戻った。

……やっぱり、痛覚無い方がいい。

それから10秒も経たないうちに、電車に撥ねられた体は全快したようだ。元より、肺のダメージはすぐに回復していたので、足首さえ戻れば全快という訳だ。

(……楓には、知られたくないな。やっぱ)

ふと、幼馴染の顔が思い浮かぶ。

彼女は、昂一が既に死んでいると知ったら、一体どんな顔をするのだろうか？

きっと、彼女は、今まで昂一が見てきた中で、一番哀しそうな顔をするのだろう。

だったら、嘘を吐くほうが、ずっとマシだ。

こんな、現実ではありえない体になっていることを悟られないように。

人前では、目立たないよう。怪我をすることのないよう。そうやって、仮初の“生”を生き抜くしか無いのだろう。

「ゴメンな。待たせた」

そうやって少女の手を取ると、

やっぱり少女は何も言わず、ただ、昂一の後について、てくてくと歩き出すのだった。

1 - 2 <未知> (後書き)

一話の長さ、もっと短い方がいいんじゃないでしょうか……。

カン、カンと、二人分の足音が鉄製の階段に響く。

学校から、住宅街を抜けた先の商店街の外れにある、木造3階建てのアパート。

古くもなく、かといって新しくもない、白い外壁のアパートの1室が、昂一の自宅。

「ただいまー」

未だに癖でついつい言ってしまうが、応える者は誰もいない。

以前母と2人で暮らしていたこの2DKの部屋は、独りで暮らすには、広すぎる。

但し、今は、今朝この自宅を出発する前と違う点がある。

それは、昂一の左手の先に、少女の右手が繋がれていること。

「とりあえず、そこに……って、靴は脱いでくれ、靴は」

可愛らしい、白いサンダルを履いたまま上がるうとした少女に、昂

一は慌てて注意した。

（もしかして、日本で暮らしたことが無いのか？だから、言葉が分からないとか）

『それはない』

昂一の憶測は、即座に否定される。

『ハスタルと人間は、言葉でコミュニケーションを取っている訳じゃねえ』

「それって……」

どういうことだ、と聞こうとして、止めた。どうせ人間には理解の及ばないところだろう。

「……とりあえず、そこ、座ってて」

ひとまずは、言葉が通じるものとして、少女にダイニングの椅子を指し示す。

すると、昂一が脱いだ靴に倣ってサンダルを揃えていた少女は、何も言わずにぺたぺたと椅子のもとへと歩いていくと、ぽすっと腰を下ろした。

彼女は、相変わらず、昂一のことを、感情の籠もらない目で見ている。

「あ、あのさ、名前は？」

少女に見つめられる経験など、ほとんどしたことがない昂一は、しどろもどろになりながら訪ねた。

しかし、少女は首を傾げるばかり。

記憶喪失？

な訳ないか。人間の常識は、ハスタルには、通用しない。

それに、少女の様子は、思い出せないというよりもむしろ、名前と  
いう概念を理解していないような。

そんな様子だった。

「あ………」

どう説明したものか。一介の高校生に過ぎない昂一は、少女にモノ  
の概念を教えることができるほど、語彙力も知識もない。

「だからな。んー、つまりな。俺の名前は、昂一っていうんだけど

……」

昂一は、自分を指し示す。

「さっきのデカいのは」

『デカいのは何だ』

「あーうるさい。デカいのは、エマっていう」

両腕を広げて、大きなモノを形作る。

少女は、テーブルにちょこんと両手を載せて、じっと、そんな昂一  
の様子を見ている。

「俺は、あのデカいのを、エマって呼ぶ。エマは、俺を昂一って呼  
ぶ。それが名前、なんだけど」

人差し指で、そっと少女を指し示す。

「君は？何て呼んだらいい？」

「……」

少女は、昂一の指が指し示す方を見た。即ち、己の胸元を。

（やば、もしかして何か地雷踏んだか？俺）

そんな危惧をしていた昂一だったが、不意に面を上げた少女と目が合い、理由もなくどきりとしてしまった。

綺麗な瞳が、昂一を見据えて。

少女の小さな口が、言葉を紡いだ。

「ない」

その声は、冬空のように澄んだ、今にも消え入りそうな声だった。

「ナイ？ナイっていう名前？」

少女は、昂一の言葉に、首を振る。

「なまえ。ない」

今度は、はつきりと。

はつきりと、そう言った。

「……もしかして、有る、無いの、無い？名前を、持っていないのか？」

恐る恐る発せられた昂一の問に、少女は首肯する。

「……そんなことってあるのか、エマ？」

昂一は、彼自身の中のハスタルに訊いた。

『オレに訊くな』

「……ちよっと待てよ。エマは、その名前を、どうやってつけられたんだ？」

浮かんだ、一つの疑問。

思えば、昂一は、ハスタルについて知らないことだらけだった。

特に、ハスタルの出生について。

命のサイクルについて。

今まで微塵も不思議に思わなかったことが、この少女によって、露わになる。

「……誰に、名づけられた？」

『……その話をするのは、面倒だが』

「でも今は、その知識が必要な時だ」

昂一は、静かな口調で語りかける。

「頼む。教えてくれ」

エマは、暫くの間黙っていたが、ややあつて、

『オレが人間にこの話をするのは初めてだが』  
ゆっくりと、語りだした。

『総てのハスタルには、母とも言える存在がいる。俺たちは、女王<sup>レギナ</sup>と呼ぶが……ハスタルがハスタルの子を産む訳じゃない。新たなハスタルは、女王<sup>レギナ</sup>から生まれ落ちる』

女王。レギナ。

そんな話は、聞いたことがない。

まだエマと共生し始めて、4ヶ月しか経っていないが故、当然といえば当然かもしれないが。

エマは、なおも続ける。

『女王<sup>レギナ</sup>は、新たな命が生まれるとき、その時の季節と、時間を表す言葉で、真名をつける。真名は長えから、便宜上そのうち2文字を取って、名前とする。それが、普段お前らが呼ぶハスタルの名前だ』  
つまり彼にも、女王<sup>レギナ</sup>に名付けられた真名があつて、それを短くしたのがエマ、というわけか。

話を聞き終えた昂一は、しばし床を見つめながら、押し黙っていた。

『どうだ、満足したか？』

「何て言うか、まあ……」

エマの問いに、昂一は頭を掻く。

「何か、意外っていうか。ハスタルにも、そういう文化めいたことがあるのかと思って」

あまりにも“人間らしい”感想に、エマは、ククツと声を殺して笑った。

「何で笑う」

『別に。面白いから笑っただけだ』

……やっぱりハスタルは、人間の理解の範疇を超えている。

まあ、それよりも今は。

「じゃあこの子は、その、クイーン、に名付けられなかった、ってことか？」

昂一が尋ね、てっきり“話すのが面倒臭え”と言われるのかと思いきや、

『……それについては、思うところがある』

返ってきたのは、意外な答えだった。

「思うところ？」

昂一の問いに対して、エマは、しばし何かを考えているようで、何も言わなかった。

少女が、床につかない小さな足を、ぷらぷらとさせている。ますます、ハスタルとは思えない。

昂一が、これはもしかして本当に只の幼女を誘拐してしまったのは、と不安になった頃だった。

『明日、山形に行くぞ』

突然、エマがそんなことを言い出した。

「や……山形あ！？」

思わず、声が裏返ってしまった。

しかし、それも無理はない。

明日は普通に木曜日で授業があるし、何せ、昂一の家が、関東圏の西の方なのである。

いや、距離はさほど無いが、問題は、交通費だ。

アルバイトを週5日しているとはいえ、稼げるのは、生活費で一杯

一杯で、昂一には、そんなお金が捻出できる余裕はない。

(だからって、叔父さんにはこれ以上迷惑は掛けられないし) 母の弟にある叔父は、気のいい起業家で、昂一の学費をまるまる出してくれている。(本当は生活費から何かからすべて出してくれると言っていたが、さすがにそれは忍びなかったので、丁寧に断りした)

それだけで十分申し訳ない思いをしていたので、目的も良く分からない旅費を出してくれなどと、言えるはずも無かった。

「何で山形なんだ……」

辛うじて言えたのは、それだけ。

それに対する答えは、

『そこに知り合いが居る』

ごく、短いものだった。

「知り合いって……山形になんて行ったことないし、「何で山形に知り合いが、と思ったが、よく考えれば、思いが至った。」

エマは、ハスタル。

人の死体から死体に移り、生きる生命体。

つまり、昂一に移る前か、その前か 分からないが、かつて山形に居たことも有るのだろう。

『交通費なら問題ねえよ』

エマが、ニヤツと笑った気配が、伝わった。

『お前の食費1ヶ月分位で何とかなるだろ』

「簡単に言ってくれるな」

『食わなくても、死にはしねえ』

「……そりゃそうだけど、食えないストレスでハゲる」

抗議する昂一にエマは、ストレスねえ、と笑う。さっきからこいつの笑いのツボが分からない。

『お前、その女のことを知りてえんだろ?』

そう言われてしまうと、確かに、ほかにどうする当てもない、自分の無力さが悔やまれる。

「……分かったよ」

きつと、それが、この少女のためにしてやれることの、一番の近道なのだろう。

『そんなら、さっさと寝とけ。明日は始発で行く』

「始発……」

『山形で泊まる金、あんのか』

「……無い」

『じゃあ文句垂れるな』

人間よりも随分しつかりとしたハスタルの言い分に、昂一はうなだれるしか無かった。

それもそうだ。ハスタルの方が、何倍も長く生きている。

「さて、俺は今から夕食作るから、先に風呂でも……」

とりあえず今日は、これ以上この少女については分かりそうもない。とりつく島も無くなった昂一は、話題転換のために出した提案によってあることに気づき、更に愕然としてしまった。

……この子の着替えは？

……ていうかそもそも風呂とか一人で入れんのか？

ハスタルとはいえ、見た目普通のことと変わらないこの少女。

もしかしたら入浴など必要ないのかもしれないが、これから生活する上で様々な概念を学ばなければならないだろう。

……どうしよう。

俺がこの子を着替えさせたり風呂に入れたりするのか？

そんなラブコメみたいなこと、実際にやれ、と言われると…何かこう、自分が犯罪者になったかのような後ろめたさがある。

昂一は、ゴクリと唾を飲み込む。

俺が、やるしかないのか……

「……って、無理に決まってるだろ！」

『何を一人で叫んでやがる。幼女誘拐犯が』

「違えよ！」

息巻く昂一をからかうエマに辟易しつつも、昂一はポケットの携帯電話を開く。先程の事故の中でも、唯一の持ち物だった携帯電話と財布は奇跡的に無事だったようだ。（ちなみに教科書類は全て学校のロッカーに置き去りだったため、カバンは持っていない）着信履歴の一番上の番号にリダイヤル。

今の時間なら、ちょうど部活の中休みの頃だろう。

5回ほど呼び出し音が鳴った後、電話が繋がった。

「もしもし、俺だけど。ちょっと頼まれてくれる？」

約束の時間に、昂一は少女の着替えを持って少女と共にアパートの前に立っていた。

日はとうに暮れており、商店街の建物の間に覗く空は、薄紫色に染め上げられている。

着替えは、初めは当てもなく、どうしようもないと諦めかけていたが、あることを思い出して、母の寝室のクローゼットを覗くと果たしてそれは、そこに在った。

衣装ケースに収まっていた、小学生高学年くらいの女子向けの、洋服。

それは、今は離れ離れになってしまった、妹のものだった。よく母が、「更菜なほなとも、また一緒に暮らせるといいわよね」と言っていたことを思い出す。

妹の更菜は、別れた父親にくっ付いて行ってしまった。

昂一は、正直言って、どちらでも良かった。当時は中学2年生だったが、一人でも生きていけるんじゃないかとさえ思っていた。しかし、昂一は母に付いていった。

どうしようもなく、危ういところのある母だったから。守らなければ、と思ったのかもしれない。

少なくとも、母は、盲目的に溺愛していた夫と娘が目の前から居なくなることで、ノイローゼになりかけていた。

そうか。

昂一は、自分と手を繋いでいる少女を見て、思う。

この子は、更菜に似ている。

だから、とっさに助けようなどと思ったのだろうか。馬鹿馬鹿しい。もちろん、記憶の中の妹とは、背丈も、顔立ちも、声も違う。

けれども、そのふわふわした、掴みどころの無い雰囲気、妹を彷彿とさせるのだ。

（案外俺も単純なもんだ）

妹に雰囲気似ているから、なんて。他人だということは分かって

いるのに。

そもそも、妹と離れ離れになったのは、8年も前の話だ。今頃は、あいつも中3だろう。

そんなことを考えながら、山の方へと帰って行くカラスの群れを見送っていると、

「やつ。お待たせ〜」

不意に、声が掛かった。続いて、自転車のブレーキの音。

「お。遅かったな」

昂一が振り返る。自転車に跨った楓は、ハンドルを持っていない方の手で、小さくゴメン、と謝った。

「何かその踏切で事故があったみたいでさ。警察が目撃者情報探してて、何かうちの高校の人らしくて、捕まっちゃって……およ？」  
事故、という言葉に身を固くする昂一をよそに、楓は隣の少女の顔を覗き込む。

「わお。かわい〜。昂一、この子、どちらさん？まさか、更菜ちゃんじゃないよね？」

「そんな訳無いだろ。更菜は中3の筈だ」

「だよ〜。ちよつと似てるけど」

楓とは、小さい頃から家族ぐるみの付き合いをしていたため、当然彼女も更菜のことを知っている。

そうか、他人から見てもやつぱ似てるのか。

「で、この子、どうしたの？それに、今日中に学割取ってきてくれて。急に取るの、大変だったんだよ。何なの？」

昂一の隣に身元不明な少女がいる事態が良く分からず、少々ご機嫌ななめらしい楓。そんな彼女の質問責めに遭い、昂一はしどろもどろになりながらも必死に楓が来るまでに考えた“事情”を説明する。  
「実は、信じられないかもしれないけど、この子は俺の遠い親戚らしくて」

「ほつほつ」

楓の探るような眼差しに、思わず身を引きそうになる。

全て見透かされているようで、この眼差しは昔から苦手なんだ。

「で、家出してきたみたいでさ。俺のどこに来ただけだ」

「こんな小さな子が！？わざわざ遠い親戚の昂一のところには？」

うん。無理はあると思う。

しかし、昂一は構わず話す。

「でも、親御さんが心配してるだろうなと思って。何かあったみたいで、この子は帰りたいから、明日山形に行って、事情を聞いてくるつもりなんだ」

「はあ、山形あ！？」

さすがの楓も心底驚いたようで、素っ頓狂な声を上げる。先ほどの昂一と同じリアクションだ。

「電話じゃだめなの？」

「それが、父さん方の親戚で、全然電話番号は分からないんだ」

「……行こうとしてるってことは、住所は分かっているってことでしょ？住所は分かるのに電話番号は分かんないの？」

痛いところを突かれてしまった。しかし、そこを逐一説明しようとするれば、ボロが出るだろう。

こうなったら、もうヤケだ。

昂一は、彼女が口を挟めないように、一気にまくし立てる。

「住所も分からないけど、小さいころよく行ったから、駅のすぐそばってのは覚えてるんだよ。駅名が分かりや、経路は携帯で調べりゃ分かるだろ。だから、明日一日この子を預かってほしい。事情を聞いて、連れ戻した方が良さそうだったら、親御さんにも来てもらうから。な、頼む」

昂一に懇願された楓は、「あんたんとこ、山形に親戚なんて居たかねえ……」などとおでこに手を当てて訝しみつつも。

「まあ、いいよ。その代わりに、今度練習付き合っつてね」と、笑顔で承諾した。

「それはちよつと……」

背中に冷や汗をかく昂一。

練習に付き合っつて万が一怪我をすれば、自分の異常さが楓に分かってしまうという、恐怖。

「嫌なら、先生にズル休みつて言うよ？」

何というクラス委員。もちろん無駄に欠席を増やしたくはないし、ココはとりあえず引き下がるのが賢明な判断だろう。

「…………お付き合いします」

またこのパターンか。エマが頭の中で、笑うのが分かる。

いいよな、ハスタルつてのは、面倒臭い人間関係なんてのが無くて「ねえ、お名前は何て言うのかな？」

自転車を降りた楓が頭を撫でながら少女に訪ねると、少女が首を傾げた。

無い、などと言われてしまうと色々ややこしいことになりそうだな。昂一は慌ててフォローする。

「あ…………その子、最近まで外国で暮らしてたらしくて、あんまり日本語通じないかもしれない」

「そうなの？よく山形からこんなとこまで来れたねえ」

頭を撫でられている少女は、大人しい。こういうのは嫌じゃないのか。何も感じていないだけか。

「多分、誰か親切な人が…………いたんじゃないかと思うけど」

本当にいたら、このご時世に、国宝級の人物であろうが、楓は、「そういう人もいるもんなのねえ」と、妙に納得している。とりあえず、練習に付き合っつと決めた時点で、この子がどうやってここに辿り着いたかは、どうでも良くなったようだった。

「昂一、この子、名前は？」

顔を上げた楓に訊かれて、一瞬頭が真っ白になってしまった。

そうだ。俺は、仮にはいえ、この子に名を与えなければならぬ。それがとんでもなく神聖で、重大なことに思えて、今まで考えていた適当な名前が、頭から全て吹っ飛んでしまった。

しばしの間、沈黙が辺りを支配する。

昂一から返答が得られないことを不思議に思った楓が口を開き掛け

たとき、

電線の上のカラスが、カア、と高く鳴いて、

それが合図であったかのように、昂一の口がとっさに動いた。

「……らな」

「ラナ？」

「そう。ラナ。本名は長いから、忘れた」

「何それ。まあいいや、ラナちゃんって言うのね。宜しくね」

くしゃくしゃと頭を撫でる楓と昂一を、少女は交互に見上げる。

「……お前のことだ。お前の、名前」

昂一が耳元で囁くと、少女は、確かめるように、

「……らな？」

と、小さな声で呟いた。

「ラナちゃん」

楓が屈んで少女と視線を合わせた。

吸い込まれそうな、色素の薄い瞳。

その瞳を見た楓は、まるで恋に落ちたときのように、どきん、と心臓が跳ねるのを自覚する。不思議な魅力を持った女の子だ。

「ラナちゃん。私は、かえで。今日と明日だけ、私のおうちで、一緒に過ごそうね。よろしくね」

聞き取りやすいよう、ゆっくりとそう言って手を差し伸べると、少女はほんの僅かな逡巡の後、

「……はい」

と、昂一と繋いでいた右手を、楓の手に乗せた。

とりあえず、少女…ラナにも、楓にも、納得して貰えたらしいことで安堵した昂一は、ほう、と息を吐いて、濃紺に変わりつつある空を仰いだ。

ラナ。

更菜の、らな。

妹の名を、貰っただけだ。

やはり、あの時。楓に名を問われた時、脳裏に過ぎつたのは、妹のイメージだった。

よく考えれば、昂一にとってこの年頃の知り合いなど居ないから、それも仕方ないのかもしれないが。

兄ちゃん、と呼ぶ妹の声が、頭の中で蘇った気がした。

妹は、母や自分よりも、父を選んだ。

今、父や妹は、何をしているのか。幸せに暮らしているのか。それを知る術は、無い。

だから。

できれば、この妹の名を貰った少女が、否。ハスタルが、穏やかに生きていけることを、願わずには居られなかった。

少女がハスタルである以上、そんなことが、あるはずなのに

それは、夏が始まるうとしている、5月のよく晴れた日曜日のことだった。

「昂一。今から、あそこの山に行かない？」

昼食を食べ終わって、突然そんなことを言い出した母が指さしたのは、家から見える、小高い山。

桜の季節が終わり、新緑に萌える木々が聳えるのは、小さい頃、よく家族で出かけた、山だった。

シングルマザーである母のことは、別に嫌いでもないし、その日は部活動も休みだった。

だから、断る理由もない昂一は。

「ん。いいよ」

と、二つ返事で承諾したのだった。

その山は、道がきちんと整備されている山で、山頂まで車で行くことができる。

山頂の公園の駐車場に車を止めて、そこから公園のトイレの横を抜けると、そこには「立ち入り禁止」と書かれた、木製の古いプレートがある。

この先が、朱野一家の“秘密の場所”。

小さい頃は両親に手を引かれて良く行ったものだ。

プレートの警告をお構いなしに進み、少し森を抜けると、そこには断崖絶壁と、その遥か下に広がる絶景があった。

「懐かしいよね。よくこうして、家族4人で、夕陽を眺めたよね」  
母は、昔よくそうしたように、昂一の後ろで大きな岩に腰を下ろしている。

昂一も、母の一步前にある小さめの岩に登って、眼下に広がる街を見下ろす。ここは、幼少の頃、昂一にとって一番のお気に入りの場所だった。

「お父さんのこと、覚えてる？」

問われて、昂一は、頭の中に父を思い浮かべた。

いつも口癖のように「テストでいい点取ったら良いもの買ってやるぞ」と言っていた、父。

その顔は、昂一の記憶の中では、既に朧げだった。

いい点を取っても、買ってもらえるのは父のセンスで選んだ、意味不明な雑貨や文房具ばかりで、特に良いと思えるものは買ってもらったことも無かった。

けれど。母は、その父のことが、忘れられないらしい。

「お父さんも、更菜も、ずっと一緒に暮らせたなら良かったのにね」  
そう言う言葉で言葉を震わせる母の横顔には、涙が流れていた。

父と母が別れることになった日。

その日は、しがないサラリーマンであり、いつも定時に帰ってくる父が、珍しく夜遅くに帰ってきた。

酔っ払った父からは、きつい香水の匂いがした。

それは、多分同僚の付き合いか、もしくは成り行きだったのだと思う。父に自ら進んで浮気をするだけの度胸があるようには、今でも思えないから。

しかし、母は。父と、家族を心から愛している母は。

キッチンから、鈍い光を放つ包丁を持ち出して来たのだ。

刃物の輝きを見て一気に酔いが冷めた父は、慌てて母を取り押さえたいらしい。

深夜、1時頃。床に落ちた包丁が、がしゃん、と耳障りな音を立て、

揉み合いになつて椅子が倒れる。

もちろん力では父の方が上だったし、その時物音で起きだしてきた  
昂一と更菜も、慌てて止めた。

二人がリビングに来たとき、父は母に馬乗りになつて、抑え込んで  
いた。

そして父は、肩で荒く息を吐きながら、ぐしゃぐしゃに泣いている  
母に向かつてこう言った。

「前からそうだったが、お前はふとしたことで、すぐに感情が爆発  
する。ちよつと危ないところがあるんだ。俺もお前が嫌いじゃない  
が、このままでは、俺たちはうまくやれないと思う。お前の我儘で、  
昂一や更菜も悲しい思いををすると思うんだよ。だから　離婚、し  
よう」

思えば、父は、こうなることを望んでいたのかもしれない。

このようなシチュエーションが出来上がるのを待つて、この言葉を  
掛けたのかもしれない。

子供二人の前で、そのような話ができる父の無神経さには、恐れ入  
つたが。

自分がその父親の子供であることを誇りに思える日は、永遠に訪れ  
ないだろう。

母は、何も言わなかった。

ただ、荒い呼吸をして、涙をぼろぼろと流していた。

父は以前から用意していたらしく、仕事用のシンプルな鞆から、淀  
みない動作で紙切れ　離婚届を出した。

そこには、既に、父の名前と捺印があつた。

「好きだったのにな」

遠くを見つめる母の表情は、その日のことを思い出していることを物語っている。

好きだから。愛しすぎてしまっていたから。

だから母も、何も言わずに離婚届に名前を書き、印を押した。このままでは、狂ってしまう自分が分かっていたのだろう。

「でも、父さんとも更菜とも、金輪際会えない訳じゃ無いだろ？」

昂一が後ろを振り返り、取り繕うように母に語りかける。

「そうだね」

母が、突然立ちあがった。

「二人とも、ちゃんとココに居るもんね」

母は、自分の胸元に手を当てる。

何か、おかしい。

二人は、ここにいる。この胸の中に

違う。俺は、そんな意味で言ったんじゃない。

その言葉は、生きている人間には、使わない。

それはまるで、死者を悼む時のような

「もちろん、昂一も」

遠くを見ていた母の視点が突然こちらを向いて、昂一は射すくめられたように動けなくなる。

その表情は、あくまでも穏やかで。

だからこそ、言葉と表情に、微妙な違和感があった。

おかしい 何を言っている？

分からない。分からない。

考えても、分からない。

ただ、ねっとりとした焦燥感だけが、背筋を這い上がっていく。

「母さん。それって、どういう」

「昂一。お願いがあるの」

昂一の言葉を遮る、母の懇願するよつな声。  
こちらに、一歩近づく母。

やめてくれ、これ以上近づいたら

昂一の3歩後ろには、崖。

「私と一緒に、死んで？」

昂一の返答を待たぬまま。

彼の体は、どん、という衝撃と共に、空中に躍り出た。

景色が、目まぐるしく移動していく。

自分の、後方から、前方へと。

木々が、枝が、岩肌が、流れていく。

その速度は 一体どれだけなのだろう？

切れ切れの意識の中で考える。

自分は、今 仰向けに落下しているのだ。

自由落下。

物理で習った。

自分の体重が、60kgで、まだ落下が続いているなら、もう100mは落ちている？

やけに頭が冴えて、変な気分だ。

ああ、でも その受験のために必死に身に付けた知識も、今ここで無駄になるのだろう。

何故なら、この先にあるのは、只の硬く、湿った地面に他ならないからだ。

下に向かって。重力という、抗いようもない、物理法則に従って。どンドン、どンドン、加速していく、体。

正面には、初夏の青い空。

ゆっくりと、視線を右の方に巡らすと、そこには、自分と同じ速度で落下する母の姿。

その表情は、泣いているようにも、笑っているようにも見えた。

そんな顔するならば、

思考の断片で、その母に訴えかける。

こんなこと、しなきゃ良かったのに。

自分をこの虚空へと突き落とした 母へと。

やがて、

“終わり”は唐突に訪れた。

暗い。寒い。

湿った土の匂いと、鉄の錆びたような匂い。

昂一が目を覚ますと、遙か上空に、鬱蒼とした木々の梢が重なり合っているのが目に入った。

ちらちらと降り注ぐ木漏れ日が眩しい、と感じる。

一瞬自分がなぜそこに居るのか思い出せなくて、ぼんやりと記憶を辿る。

日曜日。昼飯を食べて、山に行つて。

秘密の場所に行つて、景色を見て、昔を思い出して。そして

そうだった。俺は、母さんに、あの崖から突き落とされたんだつた。

その事実には、昂一は、どうしようもない絶望感に襲われた。

俺が、母さんを守るつて。守れてるつて思っていたのに。

それは、やはり、まだ二十歳はたちにも満たぬ子どもの思い上がりだったのか。

結局、母は、死を選んだのだ。

悔しい。

母に、殺されかけたことが、ではなく。

なにもできなかつた、自分。

死ぬ覚悟を決めていた母に気付かなかつた、自分。

体が、痺れたように動かない。

辛うじて動く首をのろのろと横に向けると、そこには仰向けになつて事切れているらしい母の姿があつた。

ごめん。俺は、一緒に死ねなかつたみたいだ。

でも、ここでずっとこうしていれば、いつかは死ねるのかもしれない。

そうしたら、母の為になるようなことが、できるのだろうか。

今まで何もできなかつた自分も、一緒に死んでくれと懇願した母の願いを聞き入れることができるのだろうか。

少しずつ、少しずつ、体から力と体温が失われていく気がして、昂

一はゆつくりと大地に身を預ける。

目を閉じると ああ、これは、走馬灯だろうか。

次々と思ひ浮かぶ、大切な人たちの顔。

母さん、父さん、更菜

じいちゃん。ばあちゃん。

おじさん。おばさん。

友達。クラスメイト。

楓……。

それは、幸福な記憶だつた。

会いたい。会いたい。

皆に会いたい。

死んだら、会えるのだろうか？  
分からない。知らない。

だって、まだ、自分は、死んでいないから。

死後の世界は、誰も保障などしてくれないから。

けれど、今、確かに分かるのは

それは、生きていれば、“いま” 生きている人間に会うことができる、ということ。

昂一の閉じた瞳から、一筋、涙が流れた。

ああ、やっぱり。

母さん、ごめん。俺はやっぱり、一緒に死ぬことはできない。

死ぬのは、怖い。

寂しい。

嫌だ。

俺はまだ、ここで 生きて、いたいんだ。

意識が、頭の中で、氾濫する。

ぐちゃぐちゃになった思考の中で、昂一は、ただただ生を願う。

『おい。起きろ』

突然誰かに呼ばれた気がして、昂一はうつすらと目を開けた。

目を開けて天国にでもいたらどうしようかと思っただが 良かった。

目に映るのは、先ほどと変わらぬ初夏の木漏れ日。

しかし、その木漏れ日に輪郭を縁取られる“誰か”が、昂一の目の

前にいた。

声の主は、彼（男性の声だったから、彼だろう）のようだ。

（助かった……もしかして、人が通る所に落ちたのか……）  
とりあえず、生きる希望が見えたことで、少しだけ安心する。  
まだ意識はあるし、すぐにでも病院に運んで貰えば、助かる見込みはあるはずだ。

しかし、“彼”は昂一にとって、希望でも何でも無かった。

『どうだ、また、生きたいか？それとも死んでいたいか？』

彼は、特に助けを呼ぼうともせず、無慈悲に昂一に問いかける。

こうしている間にも、自分は死に一步ずつ近づいているかもしれないのに。

彼の言っていることは、なんだか、少し、おかしい。

正直なところ、そんなことはどうでもいいから、早く救急車なりレスキューなりを呼んでくれ、というのが昂一の答えであった。

しかし、声は出ない。口すら、動かない。

だが、心配せずとも、不思議と昂一の考えは彼に伝わったようだ。

『救急車なんて呼んでも無駄だ。何故なら、お前は』

声の主が、にやりと笑った気がした。

目が慣れてきたのか、徐々に逆光で陰になった“彼”の姿が露わになってくる。

大きい。

ごつごつしている。

青みがあった、黒色。

背中に何か、背負っている？

それは、翼。鳥のような、翼。

昂一に覆いかぶさるようになっていて、それは 背に一对の翼を持った、闇色の狼だった。

およそ狼というには、大きすぎる体ではあったが。

その狼らしきものは、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

『死んでいるからな』

死んでいる。

死んでいる？

理解できず、もはやおぼろげな意識しか残っていない昂一の頭は、理解の限界を超えた。

おかしいじゃないか。そしたら、今ここでこの景色を見ている自分は、何者なのか。

『もう1分もしたら、お前の魂は体から遊離して、やがてお前はこの世界から完全に居なくなる。つまり、それが本当の死。それを迎える前に、お前の決断を聞いておきたい訳だが……』

彼が話しているうちに、徐々に視界が狭まってきた。

存在が希薄になるような感覚。

世界が、遠ざかる。

ああ、これが本当の死、なのだろうか。

『もう一度聞く。生きてえのか、死にてえのか、』

視界が、黒に支配されていく。

けれど、その遠ざかる世界の中でも、彼の声は、

昂一の魂に、はっきりと響いた。

『どつちだ、昂一!!』

生きたいのか。死にたいのか。

俺は

『昂一』

誰かの呼ぶ声。

あの時と同じ声。

そう、あの時俺は、母さんに突き飛ばされて、死んで

『起きろ』

あの時と同じように、その声は俺に覚醒を促す。

あのまま、あそこで、野垂れ死ぬという選択肢もあったはずだけど、でも。

俺は、生きることを、選んだんだ。

『起きろ。もう着く』

エマの声と共に、軽快なメロディが鳴り響き、昂一の意識は覚醒した。

「間もなく、山形。山形です」  
ゆったりとした男性の声の、アナウンス。

昂一は、自分が新幹線に乗っていたことをぼんやりと思い出す。

東京から、シルバーの車体の新幹線・つばさ号で2時間ほど。久々に乗った新幹線のシートは存外地良く、どうやら、その間完全に

眠りこけて居たようだ。

何とも目覚めの悪い夢を見たものだ。

あの時の事を夢で見たのは初めてではなかったが、今までで一番生々しい夢だった。

その夢の感触を忘れたくて、昂一は無理やり別の事を　　学校のことを考える。

今頃、昂一は“身内の都合で”欠席になっているはずだ。そのあたりは、楓が上手くやってくれているだろう。

ラナは、大丈夫だろうか。まあ、そちらについての心配も無用だろう。楓の母は、昂一が一人暮らしになってからも何かと構ってくれる世話焼きだから、一人っ子の楓に妹ができたようだと言んでいる姿が目には浮かぶ。

窓の外を流れる景色が、徐々に緩やかに目に止まるようになる。やはり、心なしか、こちらの方が関東よりも空が澄んでいるように見えた。

『降りたら、すぐに乗り換える。その前に、涎拭いとけよ』

エマに言われて、昂一はバツが悪そうに口をへの字に曲げ、パーカーの袖で口元を拭った。窓ガラスには、眠たげな自分の姿が映っている。

忠告されなければそれはそれで恥をかいていたかもしれないが、何だか無性に腹が立った。

## 2 - 2 <老人>

駅から歩いて程なくすると、商店の建ち並ぶ通りに直面する。最近新しい建物も多くなってきたが、このあたりは通りを一本外れると、たちまち昭和臭の立ち込める町並みとなる。

そんな古い街並みの中に、目的の人物は住んでいるらしい。もちろんエマのナビゲートもあるにはあるのだが、どうやらここ数年で随分と景観が変わってしまったようで、あまり自信が無い様子であったため、携帯のナビゲーションシステムに頼る結果となった。昂一としては、パケット代も馬鹿にならないため極力使用は控えたかったところだったが、致し方ない。全く、便利な世の中になったものだ。

その人は、一体どんな人物なのだろう。昂一は思う。

ハスタルに宿主にされる人間は、生きる意志のある人間。やはり、自分のように、まだ何も成し遂げないまま終わってしまった人間なのだろうか。

そんなことを思いながら、昂一は着ていたグレーのパーカーを脱いで、腰に巻きつけた。

東北というと寒いイメージがあつたため、一応薄手のパーカーを羽織ってきたのだが、どうやらそれも杞憂だつたようだ。道行く人々は皆半袖で、9月の厳しい残暑に顔を歪ませている。

どうやら、今日は相当暑い日、らしい。

(らしい、としか言えないのもちょっと悲しいけど)

4ヶ月前、エマと出会ってからは、暑さも寒さも、痛みさえも感じなくなってしまうた。

味覚も鈍ったし、食欲も減った。

そのくせやたら眠いし、傷の治りは驚異的に、いや、異常なほどに早い。

生きているんだか、死んでいるんだか、良く分からない。あの世とこの世の間をふわふわしているような、そんな生活。

生きるための、活動。それが生活という言葉の意味だとしたら、もしかしたら自分の過ごしている日常は、もはや“生活”などとは呼べないかもしれない。

(まあ、さほど後悔はしていないけど)

『当たり前だ。後悔してるようだったら、とっくにお前の体なんか捨てている』

いつの間にかエマが昂一の思考を聴いていたらしく、横槍を入れてくる。

「そうだな。ハスタルって、生きる意志のある人間に憑くんだけ」  
『憑く、つつう表現は俺としては心外だな。まあ、お前が死にたくなったら、さつさと死ねばいいさ。その代わり、その時は他の死体を用意してもらおうぞ』

「……」

昂一は、息を吐く。

この日本でそんな都合よく、“生きたがっている”他人の死体が手に入る訳がない。

『病死は駄目だな。生きるのを諦めているっつーわけじゃねえが、ある意味死を覚悟して受け入れている場合もあるし、死ぬ直前に寝たきりだと体の状態も良く無え。何より体の状態が緻密にモニターされてるから、突然生き返ると不自然だからな。できれば、突発的な事故か、事件か　いわゆる、“志半ばで”ってのがオレたちにしてみりゃ一番ベストだ』

嬉々として話すエマ。

鳥肌が立った。やはり、この生命体の価値観は、人間とはずれてい

る。事故を装って巻き込むのも、人としてどうかと思う。増してや他殺

など。「……どうやら、俺が死ぬのはまだまだ先になりそうだ」

『そりゃ結構。但し』

それまで雄弁だったエマが、突然、まるで死刑宣告をするように、  
敵かな口調になった。

『お前の外見は、オレがお前の体を乗り捨てて、お前が本当に死ぬ  
まで変わらねえからな。今のままの暮らしは出来ねえし、あの楓っ  
つう女とも近い内に縁を切るんだな』

まるで、どころか、それは死刑宣告に等しかった。

生まれてから今まで長い時間を共に過ごしてきた、家族同然の彼女  
と、二度と会えない日々が、やがて来る。

それは、今の昂一には全く想像が及ばないことだった。

親しいからこそ、彼女は、昂一の異変に、人間としての異常さに、  
真っ先に気づくだろう。だから、一緒には居られない。

その日が来たら、自分は、耐えられるのか。

(それに耐えられなくなるときが、俺の死ぬとき、なのかな)

これ以上、家族を失ってたまるものか。

エマに読み取られないように、思考の隅でそっと思っただ。

『そこを右に曲がってすぐの駄菓子屋だ』

不意にエマの声が脳に響いて、思考が現実に引き戻される。

ごちゃごちゃとした、見通しの悪い十字路を曲がると、左手に、建  
物に挟まれて窮屈そうに佇む小さな駄菓子屋があった。

「ここか？エマの知り合いが居るのって」

『……まだおっ死んでなけりゃな。多分引つ越したりはしねえはずだが』

エマの言葉に、昂一は急に不安になりながらも、軒下をくぐる。古い家の匂いが鼻をかすめた。

店頭には、誰もいない。プラスチック製の容器にこんもりと盛られた駄菓子たちが、留守番をしていた。

……どうしよう。ここまで来て無駄足だったら。

一抹の不安を消し去れない昂一に、『だからどうした』と、エマが発破をかける。

『店が開いてるってことはやってんだろ。呼んでみな』

「……すいませ〜ん」

エマに促されて、店の奥に向かって声をかける。しかし、人が出てくる気配は無い。

昂一は肺にすうっ、と空気を送り込み、

「すいませ〜ん！」

今度は、もっと大きな声を張り上げる。

すると、店の奥の磨り硝子に人影が移り、ごそごそと何かが動く気配がした。

やがて、待ちかねたように、ガラス戸が、ガラリとと勢いよく開く。

「はいはい」

そう言つて店の奥からサンダルを履きながら出てきたのは 高齢、と思わしき女性だった。腰はしっかりしているが、髪は見事な白髪だ。

……ヤバい。ものすごく人違いな気がする。

「すまんの、昼寝ばしつたっけ」

今の難解な言葉は、「昼寝をしていた」という意味だろうか。ニコリと笑った<sup>まなしり</sup>眦に皺が寄る。温和そうな老人だ。しかし、昂一が想像していた“ハスタルの宿主”のイメージからかけ離れていて、今一この老人が目的の人物とは思えない。

というか多分、違う、と思う。

「お客さんだべか？」

「あ、俺は……」

どうやって切り抜けようか、適当に菓子でも買って帰るか、と思案を巡らせていたその時。

「おやおや」

不意に、老婆が細まっていた眼を見開いた。

「エマが？」

老人の問いかけは、昂一に対するものではなかった。

まるで、誰かと話しているように、彼女が“自身の中の誰か”に聞き返す。

これは、まるで 誰も居ない空間に向かって話す、滑稽な自分を客観的に見ているような光景だ。

「久しぶりだの。姿を見せてくんねが？」

老婆が、昂一に 否、昂一の中のハスタルに向かって話しかけている。

瞬間。

瞬きを一つする間に、目の前に巨大な濃紺の獣が顕れた。

エマだ。小さな店の中で窮屈そうに身を屈ませている。

ハスタルの姿は宿主の人間たちには見えるとは言え、その存在は現実の物に干渉することは無い。つまり、幽霊のように物質をすり抜けるため、このように身を小さくして収まる必要は無いのだが、その様子に、この老人に対する配慮が伺えた。

『よう。久しぶりだな、婆さん。それに、シス』

エマが老婆に語りかけると、またもや刹那の間に、老婆の背後には、真っ白なふわふわの猫が顕れる。

身の丈は人間の子供くらいで、どういいうわけか、頭からは1本花が生えている。

白猫は、空中にぶかぶか浮かびながら、腕を組んだ。

『宿主が変わって、ボクにわざわざ挨拶しに来たのかい？マメだね

え、エマも』

猫好きなら思わず抱きしめてしまいそうなほど可愛らしい外見とは裏腹に、こんなことを言っただけは失礼かもしれないが、軽薄そうな声。エマの低く沈むような声とは違って、中性的だ。

『少年。エマの宿主になるなんて、災難だねえ』  
にやにやと笑って、白猫がこちらを見る。

ああ、シス、と呼ばれたこの白猫もまた、ハスタルなのだ。急にそのことを思い知る。

エマとは全く外見が違ったため、同じ種族とは思えない。

少なくとも、生まれて初めてエマとラナ以外のハスタルを見た昂一の、それが率直な感想だった。

これだけ違えば　まあ、確かにラナのような外見のハスタルが居てもおかしくないのかもしれない。

「これ、シス。お前もちゃんと挨拶しろ」

無遠慮に話しかけるシスを宥める老人。

『妙婆さん。あんたはお人好しだねえ。ま、こんなガキンちよには妙婆さんに言われたって挨拶はしないけどさ』

シスは、大仰に肩を竦める。

ガキンちよと言われたのはスルーするとして（ここで反応したら本当にガキだ）　その様子は、いつもエマに見下されてばかりの昂一とは違って、対等な関係と、確かな信頼関係のようなものが見て取れた。

このお婆さんは、相当長い間ハスタルと共に居るのだろうか。

そんなやり取りを気にも留めず、エマが、首を屈めて老人と視線を合わせた。

『婆さん。シス。今日は挨拶に来た訳じゃねえ。急ぎの話があった。来た。実は』

「まあ待で」

老人が、エマの言葉を遮る。

エマは、黙って老婆の話に耳を傾ける。物凄く貴重なシーンだ。

「お前さんだも、疲っちゃべ？上がってお茶でも飲みながら、まずは自己紹介でもしてもらおうがな、少年」

最早大物としか思えない老人の言葉に、昂一はただ、こくこくと頷いて従うことしか出来なかった。

場所は変わって、店の奥の居住スペース。老人の家の、居間である。  
「私の名は、たかくらたえこ高倉妙子だ。シスのように、妙婆さんと呼んでくれて構いねえがらな」

久しぶりに楓の家以外の他人の家が上がって、これでもかというほどに緊張し、落ち着きなくそわそわしている昂一に、妙子はお茶を淹れながら話を切り出した。

昂一は慌てて姿勢を正す。

「あ、俺……僕は、朱野昂一と言います」

そんな昂一を見て、妙子は優しく片目を眇めた。

「コウイチか。畏まらんでもええからの。漢字は、どげさ書くんだけが？」

「あ、えっと……星のすばるがコウで、数の一、です」

「一つの、昂。良い名だの」

にこりと、妙子が笑う。

その笑顔に、少し肩の筋肉がほぐれて、緊張していた身体が楽になるのが分かった。

「すばる、ていうのは、沢山の星の集まりでの」

妙子が、昂一の前にお茶を出してから、落ち着いた動作で自分の分のお茶をずずと啜った。

「それが集まって、一つの輝きは放つ。統ばる、ていうのが、昂の語源だべ」

妙子の知恵袋に感心しながら、昂一もつられてお茶を飲む。

……美味しい。

味覚は鈍ってきている筈なのに、何故美味しいのだろう。熱さは感じなかったが、お茶を飲んで、身体が温まった気がした。

「お前さんは、きつとすばるのように輝ける。そういう星の下に生まれ人間だ」

自分の名前について、そんなことを言われたことなんて初めてだった。ちよつと照れくさい。

同じことを級友に言われていたとしても、鼻で笑い飛ばしていただろうが、この老人に言われると、何だか説得力があった。

なるほど、この老人には、エマたちハスタルが一目置くような、人間的な魅力が有るのだ。

密かに、そう思う。

「婆さん。有り難い蘊蓄だが……事態が事態だから、話を進めさせてもらうぞ」

それまで黙って話を聞いていたエマだったが、一応昂一が日帰りで帰れるように配慮してくれているのか、話を切り出す。

決して広くはない居間で、やはり窮屈そうに伏せている（姿を見せない）、エマと妙子、シスと昂一は話ができない。エマの瞳を見据えて、妙子が「んだな」と一つ頷いた。

「偉くなったもんだねえ、エマも」

「お前は黙ってる」

木製のこたつ机の上で寝そべって茶化すシスを一括し、エマは静かに昨日の出来事を話し始める。

人の形をした、ハスタルと出会ったこと。

少女が名を持たぬこと。

少女は昂一が保護したが、とりあえず今は昂一の知り合いに預けていること。

「まあ、生きてる人間を襲って生命を奪うことはねえだろうし、コイツがヘタレだから預けてきた訳だが」

「……好き放題言いやがって……」

一通り話し終えた所で、すかさず妙子がお茶のおかわりを淹れた。暫く喋り続けて、少し掠れた喉が潤う。本当に、このお婆さんの淹れるお茶は神懸かり的な旨さだ。

「なるほど」

妙子が、ずず、と茶を啜った。

エマは、そんな妙子をちらりと見遣って意見を求める。

「どう思う？やはり」

「まあ、そうだな。それしか考えられねえ」

「まあ状況からして、そうなんだろうねえ」

昂一以外の三者は、ある結論に行き着いたように、神妙な表情で頷きあっていた。

昂一一人が蚊帳の外で、何のことだかさっぱり分からない。

「どうする？これから」

「……あの」

尚も昂一を完全に無視して話を続けようとする三者の間に割って入るように、彼は控えめに拳手して存在を主張した。

「出来れば俺にも分かるように説明して頂けると有り難いんですが

……」

そんな昂一を見て、シスが寝ころんだまま、喉の奥でで笑う。

「クク、どうやら、エマに憑かれた少年が苦労してるんじゃないかと、少年を宿主にしまったエマが苦労してるのかなあ？」

シスの言葉に、昂一は大いに傷ついた。というか、怒りを覚えた。

イヤミそうな猫だとは思っていたが、本当にイヤミな猫だった。はつきり言って、ムカつく。

「ああ、面白い。見てて飽きないし」

「お前は、話の腰を折りやがって」

「二人とも、お止し。大人気ないのはお前だじゃねえのが？」

妙子の静止に、二人とも同時にピタリ、と言葉を止める。さすがの妙婆さんだった。

「すまんかったの、昂一。気ば悪くしねえでおくれ」

不思議と、妙子には素直に謝る気持ちになる。昂一はぺこりと頭を下げた。

「いや、こちらこそ話の腰を折ってしまったてすみません」

「謝ることはねえ。無知は、罪ではないからの」

昂一を妙子がフォローしたからか、シスは少し不機嫌そうに頭の花を揺らした。もしかして、嫉妬、しているのだろうか。

そう思うと、何だかこの皮肉屋の白猫も可愛く見えてきた気がする。ム力つくけど。

「昂一。つまりなあ、」

ただでさえ深い皺をより一層深くした妙子が、少し話しくそうに言葉を濁らせた。昂一の視線が、再びシスから妙子へと向けられた。

「私らの憶測でしかないのだけけど……」

『妙婆さん。こいつは多分、はっきり言ってやんないと分かんないと思うよ?』

シスが悪戯めいた顔で、尻尾をゆらゆらと揺らす。

あ。またバカにされた。

「んならば、はっきり言う。恐らくよ、その、ラナという子」

妙子は、何かを決意したかのように、昂一の瞳を見据えた。何をはっきり言うというのか。

口から出すのに逡巡が必要な事実など、あるのか。

妙子の小さくすばまった口が、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

昂一にとって、凄まじく破壊力のある、一言を。

「その子は、多分……女王<sup>シキナ</sup>だべ……」

2・2 <老人> (後書き)

エセ山形弁ごめんなさい。

完全に正しい山形弁ではないと思いますし、少し分かりやすくはしてありますが、あまりにも意味が違う場合はご指摘頂ければと思います。細かいところはご容赦ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4347i/>

---

Hast-all

2010年10月14日13時02分発行